

のどぼとけさま

望月 滋斗

う、うん、うづん……。

いくら咳払いをしても、喉の違和感は一向に消えない。

痛いわけじゃないけど、喉の奥で何かがかかえている感じ。それに、いつもどおりに喋ろうとすると声がかすれる。

「一度、お医者さんに診てもらったほうがいいんじゃないかしら」

朝ごはんのとき、麦茶をがぶがぶ飲む僕に向かって母さんは言った。

「ほら、今日の放課後とか。あんまり辛いようなら、母さんが中学まで迎えに行っておあげよっか？ パートの新しい店長はね、ちゃんと言えば早めに上がらせてくれるのよ」

「別に一人で行けるっつーの」

「あらそう。じゃあ、保険証忘れずにね。それからおくすり手帳も。念のため、印鑑とかも持っていったほうがいいのかしら」

「ああ、もううるさいなあー！」

母子家庭のウチは、昔から母さんが僕のことをしつこいくらいに気にかける。最近、僕はそれがウザク思えてきてしょうがないのだ。

そんなわけで、放課後、僕はチャリンコで町医者のもとへ訪ねた。

「はい、あーん。ふんふん、なるほどね」

医者は僕の喉の奥を一目覗くと、納得したように頷いた。

「自分でも確認してみるといいよ」

「ああ、はい」

僕は横にいた看護師から受け取った手鏡に向かって、大きく口を開けた。瞬時に目をつぶる。なぜか眩しいのだ。ライトを当てているわけでもないのに、口の中が黄色く光り輝いていた。

もう一度、目を細めて口の中を見てみた。

すると、喉の奥に後光の差した小さなおじいさんが浮かんでいるではないか。その見た目は、七福神の幻の八人目とでもいうように煌びやかだ。僕はそのまま開いた口がふさがらない。

「のどぼとけさま、と言ってね。よく変声期の男子の喉に宿る神様なんだ。赤ちゃんのころから診てる君ももう中一だし、ちょうどその時期か。だけど悪さはしないから安心していいむしろ、その宿主のことを子どもから大人に成長させてくれるとも言われているんだ」

「はあ。それで薬は」

「特に薬も要らないよ。声変わりが無事に終わればいなくなる。それまでは喉を温めたり、喉にいい食べ物摂ったりして神様を敬うように」

「分かりました……」

家に帰ると、母さんが真っ先にリビングを飛び出して玄関へやってきた。

「どうだった？ 命に別状はないって？」

『なんともねえってば』

僕は気怠そうにそう言おうとした、というかそう言ったつもりだった。

しかし、実際に口をつけて出ていたのはこんなセリフだった。

「母さん、心配ありがとう。大丈夫。声変わりしてるだけだっただけさ」

それは、久しぶりのかすれていない高い声だった。

母さんが目を丸くしてこちらを見つめている。僕はたちまち赤面して洗面所へ駆け込むと、鏡に向かって大きく口を開いた。

喉の奥では、のどぼとけさまが扇を片手に踊っていた。間違いない。コイツが僕の喉を勝手に使って喋ったんだ。

「ったく、もう……」

思わず声を漏らした次の瞬間、僕は「ふおっふおっふお」と高らかに笑った。もちろん、それも僕の意味ではない。

ふたたび、のどぼとけさまに操られた僕が勝手に喋り始める。

「君はすぐお母さんに反抗して怒鳴ろうとするからのう。それは喉によくない」

「だからって、勝手に喋ってセリフを変えるなんて聞いてない。おかげで恥ずかしい思いをしたよ」

「ふおっふおっふお」

高い声とかすれた声。僕とのどぼとけさまの会話は、まるで落語の一人二役のようだ。

それから僕は何度もうがいをした。が、のどぼとけさまは必死に喉壁にしがみついているらしく、いつまでも吐き出されることはなかった。

そうして、のどぼとけさまは僕の喉を勝手に使って喋るようになった。

家でご飯を食べるときには、いただきます、ごちそうさまの挨拶を律儀に言った。それだけならまだしも、一口食べるごとに母さんに向かって「今日も美味しいご飯ありがとう」なんて言ったりもする。僕はそのあとすぐに鳥肌が立つ。

学校でも、のどぼとけさまの口数は減らない。

先生が「この問題分かる人？」と全体に問いかけると、誰もが目を合わせないよう下を向く中、真っ先に答えを言ってしまふ。体育の準備体操では、前に立つ体育委員より大声でかけ声を発してしまふ。合唱コンクールの練習では、「男子もちゃんと歌ってよー」なんて女子に怒られる前からビブラートを効かせた高音で盛大に歌ってしまふ。

一人で帰る放課後、僕はチャリンコを漕ぎながら、のどぼとけさまを責めたてた。

「だから勝手に喋るなってば。特に学校では」

「人を傷つけるようなことは何も言ってないぞ。しかも、ワシは全て君の本音を代弁してい

るまでじゃ。授業中、答えが分かっても言おうとしない。準備体操の声も、もっと出せるのに出さない。合唱も、男子が本気で歌えbaumとよくなると君は分かっているはず。そうじゃろう?」

「それは……」

「凶星じゃな。ふおっふおっふお」

僕はふてくされて押し黙った。なのに、帰って玄関のドアを開けるなり、また母さんに向かって「ただいま!」と元気よく言ってしまう。

そんなある日、合唱コンクールに向けた放課後のパート練にて事件は起きた。

終始、課題曲で替え歌をするなどして周りとふざけていた島田くんに向かって、ついこのどぼとけさまが怒った口調で喋り始めたのだ。

「なあ、島田くん。ちゃんと練習しようじゃないか」

ああ、言っちゃってる! よりにもよって、クラスで人気者の島田くん! 意思に反して口を動かしながら、僕の脳内は焦りと恐怖でパンク寸前だった。

たちまち、島田くんはヘラヘラしながら声変わり前の高い声で応戦してくる。

「そんなに必死になっちゃって、ダッセえ」

「ダサイのはどっちだよ。必死で何が悪いんだ。必死でやるからおもしろいんじゃないか。このクラスの男子は声変わりしてたりしてなかったりでいろんな声があるけど、だからこそ、お互いに補い合えばいい合唱なるって僕は本気で思ってる。金賞だって夢じゃないって思うんだ」

息継ぐ間もなく言葉が湧き出てくる。どうかして止めなければならぬ。

「ちよっとごめん!」

僕は教室を出てトイレへ駆け込むと、のどぼとけさまに向かって叫んだ。

「おい、さすがに言いすぎだろう!」

「ふおっふおっふお。だって、あれも君の本音じゃったろ?」

「たしかに島田くんの態度は前から気になってた。でも、あんなこと言っちゃったら真正面からぶつかるに決まってる。そんなのまるで小学生じゃないか。その場を上手くやり過ぎるのが、大人ってものじゃないのか。これで僕の学校生活は終わりだよ」

のどぼとけさまは、僕の喉を使ってハアと溜め息をついた。

「君は何か、大きな勘違いをしているみたいじゃのう。言いたいことを押し殺すのが大人じゃないぞ。言うべきことを言う勇氣を持つのが大人なのじゃ」

「……………」

その日、僕は教室に戻ることができなかった。

しかし、その翌朝、肩を落として教室へと向かう廊下で、僕はありえないことに気がついた。聞こえるのだ、教室からみんなの歌声が。

まさかと思ひ、僕は廊下を駆け出した。

「ほら、だから言ったじゃろう」

教室に入るなり、男子たちが黒板の前に並んで自主練に励んでいるのを確認すると、のどぼとけさまは呟いた。中には、大きく口を開けて歌う島田くんの姿もある。

僕はリュックサックを背負ったまま彼の隣に入り、負けじと歌声を響かせた。

やがて月日は流れ、合唱コンクール当日。

司会の生徒によるアナウンスがあると、クラス一同、無駄のない動作でステージへと上がった。

指揮者が手を振り、ピアノ伴奏が始まり、僕らは歌い始める。

いつもどおり、いつもどおり。

心の中で自分自身とのどぼとけさまに何度もそう言い聞かせながら、一つ一つ歌詞を紡いでいく。滑り出しは順調すぎるほどだった。

ところがだ。それは、曲が二番に差しかかったところのこと。

僕は急にいつもどおりの歌声が出せなくなった。特に高い音になると、喉がつぶれてしまいそうになる。のどぼとけさまは助けてくれない。もしかして、こんなときに声変わりが終わって消えてしまったのではないか……。

そのとき、隣の島田くんの歌声が僕の分を補うように大きくなった。それを皮切りに、男子も女子も、とにかくみんなの歌声に勢いが増していく。

いつしか僕が上手く歌えない理由は、溢れ出てくる涙によるものに変っていた――。

果たして、僕らのクラスは学年で金賞に輝いた。先生たちによる講評では、男子と女子の歌声のバランスがよかったとのことだった。その点、やはり他のクラスは男子の音量が課題だと評されていた。

閉幕すると、僕は見に来てくれた母さんのもとへ真っ先に向かった。

「母さん、パート休んでまで見に来てくれてありがとう」

「いいえ、店長もちゃんとかっこちを優先するように言ってくれてね。金賞なんてすごいじゃない。こちらこそ、いいものを見せてくれてありがとう」

僕はもう一度、「ありがとう」とまだ慣れない低い声で言った。これまでの喉の違和感はずっかりなくなっていた。

「そういえば、隣にいた子の歌声すごかったわね。体育館の後ろまで響いてたわよ」

「ああ、島田くんのことかい」

そうだ、あとで島田くんにもお礼言わなくちゃな。

噂をすれば、そこへたまたま島田くんが通りかかった。人混みの中、僕は彼を追いかけ声をかけた。

「さっきはありがとう。助かったよ」

「補い合うって言ったのは君だったろう。俺の方こそ、あの放課後、君が目覚まさせてくれたおかげで必死になれたよ。ありがとう」

気づけば、島田くんのまだ高いはずの声はかすれていた。

「まさか、そんな声になるまで頑張って歌ってくれてたなんて」

「ああ、この声のことか。別に、大声で歌ったせいで喉を枯らしたわけじゃない。俺にもついに来たんだと思うよ」

「ついに来たって、何が？」

「声変わりさ。歌ってる途中、何か光るものを飲み込んだ気がしたよ」

そう言うと、島田くんはいつもの高い声で「ふおっふおっふお」と笑った。